

人権保育専門講座8(連続講座)～①

ともに考え合うことを通して深めよう
～各園における人権保育を推進するために～

テーマ「部落問題について考える」

～園内の人権保育推進の現状と課題を出し合おう～

常磐会短期大学 教授 ト田 真一郎 さん



今回の連続講座では、各回のテーマについて、次に示す3ステップで研修をすすめていきます。家庭支援推進保育士が、人権保育推進のために、

- ①各現場で抱えている課題を『共有』し、
- ②お互いの取組について『交流』し、
- ③だれに対して、何を、どのように『発信』するのかを考える

連続講座の1回目の今回は、「部落問題について考える」をテーマに、子どもや保護者の状況のなかにある部落問題に起因する課題を共有し、実践を交流し、どのような実践をおこなっていけばよいのかをグループに分かれて話し合いました。

ゲストスピーカーとして、元大阪府豊中市立保育所・常磐会短期大学兼任講師の西原美保子さんにご講演いただきました。



～ト田さんのお話より～



1. 人権保育実践を捉える視点(広義の人権保育と狭義の人権保育)

子ども自身の「人権力」をどう育てるか？子どもにどんな力をつけさせたいか？を考えるにあたって、2つの視点が必要である。

広義の人権保育とは？

◆「人権を守れる子どもの育成」

◆「人権を大切にできる心を育てる」ことを目標に、

人権感覚と言われるようないろいろな現実の事態に接していくときの行動の基準や行動をささえる価値観を育てたり、人権の立場から的人格形成を行ったりすることである。



「尊敬」「公平」を育てること

狭義の人権保育とは？

広義の人権保育を基盤に、個別の人権問題に関して、その独自の文脈を検討し、確かな認識を育てること。

狭義の人権保育の分野として・・・

- 同和保育
- 多文化共生保育
- 在日韓国・朝鮮人の子どもの保育
- 障がい児と共に生きる保育
- ジェンダーフリーの保育 など



「反偏見」の意識を育てること

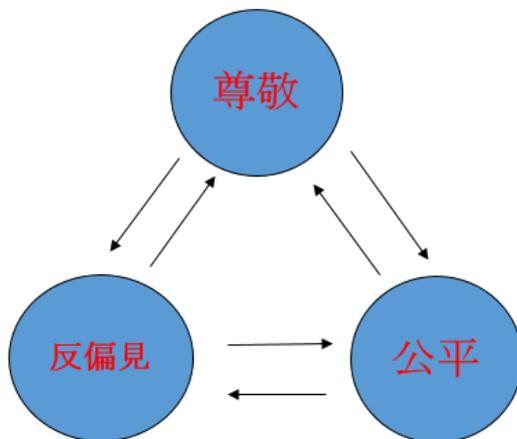
・個別の人権問題を視野に入れた人権保育実践の検討においては、その実践をとおして「人権感覚」（広義の人権保育で育てたい力）と「確かな認識」（狭義の人権保育で育てたい力）の双方をどのように育てるのかを検討する必要がある。

・保護者支援に関しては、保護者の姿の背景にある個別の人権問題を理解し、どのような影響を及ぼしているかをみようとすること、問題解決に当たっては「保護者自身の変革」だけにとどまらないビジョンをもつことが必要である。

2. 人権力のトライアングルから学ぶ

人権力の内実をどう考えるか？

人権教育・保育をとおして子どもに育てるべき人権力の中心に「尊敬」「公平」「反偏見」のトライアングルをおく。



①「尊敬」・・・人間を尊敬する力

★「自己への尊敬を追求する子ども」

自己コントロール・自立・自分への誇り・自信・自己肯定感・自己有用感など

★「他者への尊敬を追求する子ども」

仲間への関心・言うことを聞こうとする関わり・良さに気づく・相手の感情理解・その子の立場に立てる

★「命への尊敬を追求する子ども」

自分の命の尊重・命を支えてくれる人がいることに気づく・他者の命の尊重・動植物の命の尊重など

★「言う力・聞く力を持つ子ども」

自分の思いを言う・友だちの発言を聞こうとする・一人ひとりの言うことを値打ちのあるものとして受けとめようとするなど

②「公平」・・・公平性の獲得

★お互いに自己主張して解決・調整の必要性を感じ、おとなの援助で公平な解決を体験



★遊びの中で公平性を追求



★クラスの生活の中での公平性を追求



★公平性の概念がわかり、適切に使える子ども



③「反偏見」…偏見をなくす力

- ・ 文化の違いを知り、それぞれのよさを感じ、言える。
- ・ 社会的に否定的に見られている仕事を正しく説明できる
- ・ 障がい児・ジェンダーなどへのステレオタイプをなくそうとする
- ・ 部落差別とたかかってきた人々のことを知り、共感する。
- ・ だめな人間はいないし、人間の能力を発展していくものとして主張できる。
- ・ おとなのきめつけに対して、おかしいと言える。

3. 「部落問題と保育」の独自の文脈を考える ～同和保育の歴史的展開から学ぶ～

① 1970年代…同和保育の目的と方法の明確化

同和保育の目的→『部落解放の資質を乳幼児期から養う』

★同和保育が乳幼児の発達保障とともに、部落解放の資質の育成という独自の課題をもつ保育であることを確認

その後→『部落解放の資質とは何か』が検討され、具体化。

★例：1974年「4つの指標」による保育内容の視点

- ①差別をはねかえすことのできる健康でしなやかなからだの育成
- ②差別を見抜き、解放の展望を創造しうる高い知的能力の育成
- ③解放の思想を支える豊かな感性の育成
- ④正しい規律と組織性を身につける基本的生活習慣の育成

1978年「6つの原則」による保育の見方・保育カリキュラムの構成の原則

- ①部落差別の現実から深く学ぶという原則
- ②自然成長論の克服の原則
- ③能力主義克服の原則
- ④集団主義の原則
- ⑤生活と労働と保育の結合の原則
- ⑥遊びと表現の重視

初期の取組として…差別のなかで奪われてきたもの、子どもたちの課題をチェックし、カリキュラムに生かしていく試み

個別の領域のカリキュラムの作成

- ・「しなやかさ」を大事にした身体づくり理論
- ・「息」「リズム」の視点から音楽を問い直しつつ、身体表現との関連で捉え直された音楽理論
- ・子どもの生活と表現を重視する「生活リアリズム」の立場からの絵画造形理論
- ・「子どものきめつけ」をなくしていくという視点からの仲間関係理論 など



こうした成果は今日まで受け継がれ発展してきました。しかし、領域毎のカリキュラムの提起であったため、領域主義の限界を併せもっていました。そのために、総合的な同和保育のカリキュラム開発にならなかったという限界もありました。

② 1990年代以降…これまでの成果の再整理と新たな方向付け

- 部落外の子どもに対する「同和保育」の必要性の提起
- 総合的な子どもの人権の視点と「同和保育」の取組の関連づけを検討
→ 領域主義を超えたカリキュラムづくり
- 部落問題を基底においた人権保育のカリキュラム開発
→ 「偏見の克服」「関係の育ち」「自分の育ち」の3つの層からの人権保育カリキュラムの提起
- 「関係」と「活動」の視点からの子ども理解に基づくカリキュラム作成
- 「人権力」の提起
→ 人権を守れる行動が取れる子どもの育成

4. 西原美保子先生によるおはなし ～人権保育の具体的な実践から～

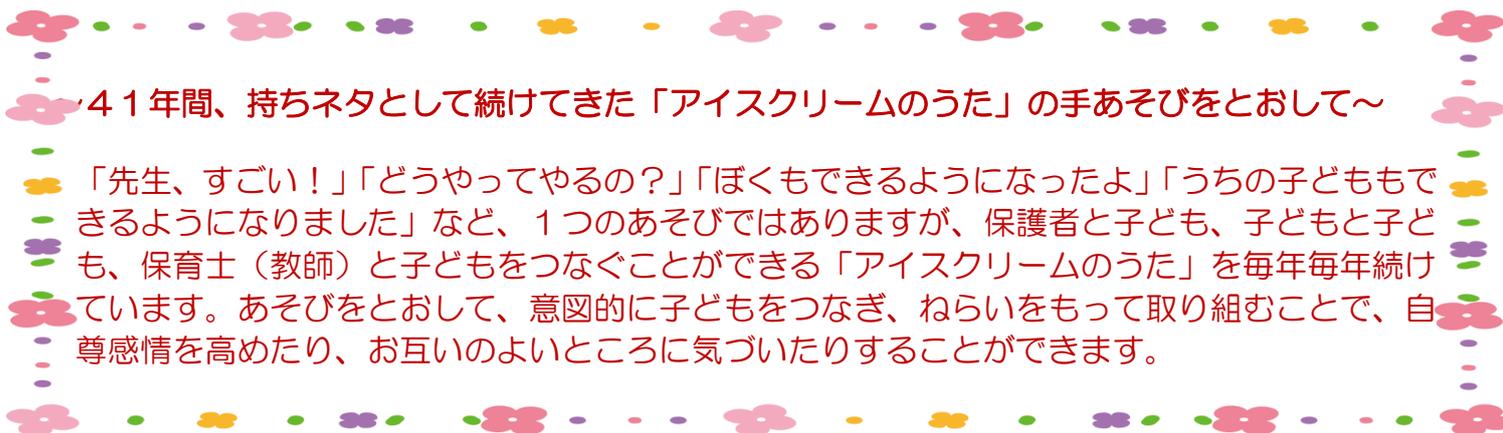


部落問題と出会って、今までの自分中心の保育や子どもを自分についてこさせようとしていた保育を仲間や保護者の方と一緒に考え直させてもらうことができました。

今までの保育のあり方を考え直しながら、自分自身の生き方をも見つめ直すきっかけを与えてもらいました。今日は、そんなお話をしたいと思います。

① 自己紹介を兼ねて…

こんなあそび知っていますか？「アイスクリームのうた」



41年間、持ちネタとして続けてきた「アイスクリームのうた」の手あそびをとおして～

「先生、すごい！」「どうやってやるの？」「ぼくもできるようになったよ」「うちの子どももできるようになりまして」など、1つのあそびではありますが、保護者と子ども、子どもと子ども、保育士（教師）と子どもをつなぐことができる「アイスクリームのうた」を毎年毎年続けています。あそびをとおして、意図的に子どもをつなぎ、ねらいをもって取り組むことで、自尊心を高めたり、お互いのよいところに気づいたりすることができます。

② 子どもや保護者との出会いから学んだこと

「差別はいけない」とわかってはいましたが、本当にそう思うようになったのは、保護者の生い立ちや思いを聴かせていただいたことがきっかけでした。保育についても、「保護者の思いを知ってから保育をする」と、先輩から教えられてきていましたが、「あの子の家は〇〇」「あの子は〇〇な子」と表面的にとらえていました。保育が思うよう



に進まないときは、「あの子は〇〇だから…」と子どものせいにしていました。そんな私を変えたのは保護者との出会いでした。



【普段は解放運動に積極的にかかわるKの父の言葉】

結婚差別を乗り越え、ようやく結婚ができ、子どもを授かったおとうちゃん。Kが生まれたときに、看護師に「抱っこしたって」と言われたが、その瞬間、我が子を抱くことができなかった。「この子は本当に生まれてきてよかったんやろか」「自分と同じような差別を受けるとちがうやろか」「そう思うとこわくてこわくて、抱けやなかったんや」

夜、寝ているKに向かって「おとうは弱いんや、ごめんな、ごめんな」と繰り返していた。ある日、Kに「とうちゃんは弱いんか？」と問いかけられた。

【在日コリアンであるRの父の言葉】

Rは自分を守るため、ぱっと頭を守るような姿があった。また、友だちに厳しくあたる姿もあった。父親から厳しく、時には暴力的にしつけられていると聞いていた。

「Rにはちゃんと育ててほしい。自分たちは差別を受けるから、正しい人間にならなあかんのや」

私にも子どもがいます。祝福されて生まれてきました。同じ命なのに、なんでこんな思いをしなければならぬのか・・・差別に対する許せない気持ちが強まりました。



さまざまなあそびや活動をとおして、子どもたちにかける言葉がかわってきました。かつてなら、人と同じような作品をつくっていたら、「〇〇さんと同じやね～」と少し嫌みもこめて子どもに声をかけていましたが、その子の作品のなかで良さをみつけ、その子にあった言葉かけ、自尊感情を高めるような働きかけをするようになりました。

【Kの訴えから】

人とのかかわりがもちにくいK。クラスの友だちがけんかをしている場面で「先生、わたし、なんもできへん、けんかをとめることもできない」と私に訴えてきました。以前の私なら、友だちと関係が結びにくい子やな・・・で終わっていましたが、「あなたは、なんもできへんことはないよ。こうやって先生に伝えてくれたやろ」と返すことができるようになりました。

【やっぱりおおかみ】の絵本の取組から

部落問題の解決を考えることにつながる絵本だと思って読み聞かせをしてきました。「このおおかみ、Rと一緒にや」とつぶやく子どもたち。おおかみの姿とRを追い込んでできてしまっていた自分たちの姿を重ねて発した言葉。この言葉から、劇へと取組をつないでいきました。活動をとおして、子どもたちはなかまとのかかわりのなかで考えたり、疑問に思ったり、心地よさを感じたりしてたくさんのことを学んでいくことに気づいていきました。

子どもたちのあそびや活動の様子や日常の姿、会話、思いを保護者に伝えるようになりました。障がいのある子どもの保護者、ひとり親家庭の保護者、高齢者とくらす保護者、被差別部落出身の保護者、在日コリアンの保護者などと一緒に、集まって話をしました。保護者の方は子どもの姿と重ねて自分のことも語ってくださいました。こうしたことを繰り返すことは、さらに、子どもたちの今、そして、これからを考えていくよい機会になっていました。



【子どもたちと親の仕事について話し合う活動のなかで】

「うちのおとうは、難しい漢字の書いてある旗のぶらさがっているところで働いている」（部落解放運動に参加している）。

「牛って、殺すって言わへんのやで。割るって言うんやで」

自分の親の仕事について何の偏見もなく話す子どもたちの姿を親の会で伝えたとき、「でも、いつかこの子どもたちが親の仕事は人には言えないと口をつむんでしまうのではないか…」という保護者の言葉が忘れられません。

子どもや保護者の姿をとおして、今までの自分自身の姿を振り返って考えるようになりました。岡山出身であったため、イントネーションで笑われたり、「もう島にかえたら？豊中にはあわんのじゃないの？」と言われたりして、自信がなくなっていた自分がいました。

子どもの頃には、「どこの出身？」と聞かれて、「〇〇島」と答えると「ああ、あの島か」と言われたこともありました。私の生まれた島は、墓石づくりが地場産業の中心でした。ダイナマイトを使っての石の切り出し作業など、命がけの危険な仕事場では、言葉遣いがどうしても荒くなってしまいます。そのことを「ガラが悪い」とか「言葉遣いが悪い」とか言われていましたので、笑われないようにと予防線をはって、笑われる前に自分から笑いをとって自分を守っていました。親の仕事を知ったときは「うちはいしや」と言っていました。聞こえ方によっては「医者」に聞こえるので。「医者？」と聞き返され、「石屋、墓石とかの」と言うと「ああ、石屋か」と親の職業に対する差別を受けたこともありました。学校の帰り道に、おばちゃんから、「あんた、どこの島？ああ、あの島の子か」と言われ、職業や地域に対して、自分の島にも部落があったことを知っていきました。

保育所の仲間から、「西原さんが来たから、差別と部落の話はせんときや」と言われることもありましたが、「島に生まれて何が悪い？」と職員集団や保護者の方に向けて強く話したこともありました。とてもよく勉強のできる同級生がさまざまな事情で進学せず就職していきました。学歴や肩書きが優遇される社会の構造を思うと、差別の構造のなかに自分も生きています。自分自身のなかにも差別意識がありました。そんな自分が「差別をなくしたい」と強く思い、行動に移せるようになったのは、子どもや保護者と出会い、差別の問題を考える機会を得たからです。夫からは、「部落問題と出会ったことで自分の生き方をみつけられたね」と言われました。

退職記念には、保育所の子どもたち、保護者が会をひらいてくれました。その会場にはずいぶん、懐かしい方もいました。時が経っても保育所のことを語り合う子どもたちの姿に出会い、おとなになった今でもこんなに仲良く話せる姿や、あの頃の自分を今でも覚えているという言葉に嬉しくなりました。

人っていいな…と、人のつながりの大切さを強く感じています。



5. 共に考え合うことをとおして深めよう～部落問題を共有する～

西原先生のお話を受けて、「部落問題・同和保育実践にかかわる課題」をグループで話し合いました。グループごとに出された課題を整理し、その課題解決に向けて、園・所ではどのような実践がなされているのかを交流し合いました。その一部をご紹介します。

子どもの姿から

- ・ 何にでもこだわって知らんふりをしない力を育てる保育をどうしたらできるのか。
- ・ 見る力、聞く力を育てる保育（正しい判断をしていく力の育成）にどう取り組むか
- ・ もっとクラスを超えたつながりを作りたいが難しい。
- ・ 一人ひとりの違いを認めあえる、受け入れられる子どもたちになるための保育が何はどうしたらできるのか。
- ・ 自分が愛されているという感情が持てない子どもにどうやって自尊感情をもたせていけばいいか。
- ・ 生活リズムが整っていない子の姿がある。
- ・ じっと座ってられないなど、身体ができていない子が多い（身体づくり）



保護者との関わりの中で

- ・ 部落問題にかかわって、を保護者と共有できる話し合い、共有できる場や機会がない。
- ・ 保護者の思い、背景をどれだけ感じ取れているのか。
- ・ 保護者の背景を知る機会があまりない（職業などは知っている）。
- ・ 身の回りで実際に差別がおこっている、差別は身近なところにあると伝えていくためにはどうすればいいのか。

自分自身の問題として

- ・ 自分自身の認識不足、部落問題について正しく理解できているのかどうか。
- ・ 部落問題に対する知識があいまいな所もある。
- ・ 活動や取組を進めようとする思いが優先してしまっていること。
- ・ 見ようとしないと見えない。見えにくくなっている部落差別の現実をどうとらえているか。
- ・ 自分自身の問題として、どこまで考えているか、人ごとになっていないだろうか。



6. 部落問題に関わる人権保育実践の「発信」(次の一步)を考えよう ～未来への種まきワーク～

一人ひとりが「発信（次の一步）」としてやってみようと思うことを考え、人権保育推進のための『種』をまきました。具体的には一人ずつが付箋に自分のできることを書きました。全員で輪になり、その小さな『種』（できることを書いた付箋）を読み上げ、『畑』（模造紙）に貼って（種まき）いきました。

～一人ひとりがまいた『種』～

- ・相手のことを知り、話す、話せる関係づくりを大切にしたい。
- ・同和(解放)保育をどのように保護者に発信していくか、工夫していくこと。
- ・自分の思いを文章にし、職員に伝えていこう。
- ・大事なことだと思うから、ちょっとだけおせっかいなことをしていこうと思う。
- ・自分の思い、考えていることを相手に伝えてみる。話すことで次の一歩にしてみたい。
- ・注意して止めてしまいがちな行動を止めずに肯定し、ほめる。クラスの子どもたちの良いところを見つけてほめる。認める。
- ・今日のワークの中で、自分自身が声を出していないことに気づいたので、発信していきたい。
- ・家庭訪問になかなかうかがえない〇〇さんの母に笑顔であいさつして、声をかけ、おうちへ立ち寄ってみる。
- ・子どものその行動に、何でかな?と考える。
- ・子どもの24時間の生活(園以外での姿)を知る。保護者の思いを知る。まずは仲良くなる。
- ・部落問題から目をそむけていた自分がいました。それは自分が部落出身だからという思いだったが、自分だからこそ発信できることがあるのかなと思う。でも難しい。
- ・正しい知識を身につけ、保護者に伝えられる力をつけたい。
- ・園の保護者の報告があるので、「豊かな就学前人権教育実践交流会」への保護者の参加呼びかけをする。
- ・子ども・保護者、たくさんの人と関わり自分の力に変える！！
- ・家庭訪問いっぱい行こう。保護者と話をしよう。
- ・今までの保育所勤務で得た経験・知識・思いなどを、今の保育所の職員に伝え拡げていく。
- ・家庭訪問で積極的に部落問題の話をしていく。
- ・学習会・クラス懇談会へ参加を促す。なぜ参加できないのか聞いていく。(家庭訪問を通して)
- ・子どもの「かわいい♡」「ここが好き」と思えることを保護者に聞いてみる。また「自分のすきなところ」も聞く。
- ・おせっかいおばさんになる！！
- ・職員間で力を合わせてできることをしよう。
- ・部落についての話(講座や地域の話)を職場の学習会で取り上げ、みんなで考えあう場をつくる。
- ・部落問題をもう一度自分の問題として捉え、考える。今、自分にできることをしていきたい。
- ・いろんな人と部落問題や、他の人権問題について自分に置き換え、考えられる機会づくりを考えたい。
- ・部落問題について考えるためのアピールの仕方を職員で考え合って工夫していきたい。
- ・子どもと関わる中で、保護者に伝えたいエピソードを見つけ(うれしい、楽しい、かわいい)園での姿を伝えながら、少しでも思いにふれられるように努めたいです。(気持ちは全員101人全員の保護者と話したい)
- ・少しでも保護者が話せる関係性をもてるよう、信頼関係を深めていく。
- ・生活体験の少なさを補うよう、園での活動を通して取り組んでいく。
- ・明日からもっと積極的に声をかけていく。
- ・週明けに保護者と話して、次の保護者会での内容を一緒に考える。
- ・保護者学習会・クラス懇談会への参加呼びかけの工夫。
- ・考える前にまずは動く！！
- ・保護者に声をかけて、じっくり話せる関係づくりにつなげていきたい。

